『東方』二九一号より

世紀末に描かれた飢餓意識

鄧 捷（東京大学文学部助手）

飢餓の娘――このタイトルから我々はどのような内容を想像するだろうか。最近、日本で翻訳紹介されている中国現代小説では、ノーベル賞作家高行健、そして既に現代の古典となりつつある鄭義、莫言の作品のほか、衛慧『上海ベイビー』（文春文庫、二〇〇一年）など新興上海を描いた一連の作品が大きなインパクトをもつ。衛慧とは世代が一つ違うが、中国では同じく「美女作家」として、話題になっている虹影の『飢餓の娘』は『衛慧みたいにクレイジー』（講談社、二〇〇四年）の横に、如何に並べられるべきか。本書はイギリス在住の作者の自伝的小説であり、一九五九年から三年にも及んだ大飢饉を中核とする「飢餓」の物語である。二〇世紀中国文学の中で、「飢餓」は一つの大きなテーマであり、路『飢餓の郭素娥』、張愛玲『秧歌』から張賢亮『緑化樹』、王若望『飢餓三部曲』、また台湾作家陳映真『山路』、李昂『夫殺し』まで、「飢餓」は政治的、社会的な受難のシンボルとして様々に描かれてきた（『三個飢餓的女人』、王德威、『如何現代、怎様文学』、麦田出版、一九九八年）。一九九七年台湾で最初に出版され、海外で好評を博した後、二〇〇〇年に中国本土でも刊行された本書は、世紀末に描かれることで、現在の中国、あるいは日本でどのような意味をもつのか。まず、小説のあらすじをたどってみよう。

一九八〇年、十八歳の私は、重慶長江南岸のスラム街で

クリックすると次の段にジャンプします。

虹影著／関根謙訳
『飢餓の娘』
四六判・四〇〇頁・集英社・二、七三〇円

一家八人、屋根裏部屋付きの十平米の一室に暮らしている。目の病気で退職した船乗りの父、長年にわたり荷運び仕事に従事して体に様々な病気を抱える母、末っ子の私を含める六人兄弟。父は無口で笑うこともほとんどなく、母はいつもとげとげしい目で私をにらみつけている。成人した兄弟たちが窮屈な屋根裏部屋にひしめいており、カーテン一枚で仕切られた寝台の向こうからは姉と恋人の物音が聞こえてくる……。狭い空間で大家族は濃密な温もりをはぐくむこともなく、私は常に孤独と疎外を感じていた。そして、いつも背後から私をつけてくる男の影が……。

孤独と見知らぬ恐怖に魘され、私は毎晩のように悪夢を見る、飢えに苦しみ、ご飯一杯のために人の足元に跪く夢を。烙印のように心に刻まれた飢餓の記憶はどこから生じたのか。私は自分の出生の秘密を探り始める。私が生まれたのは大飢饉の被害から立ち直りかけた六二年の晩夏で、

母が妊娠したのは六一年、飢饉三年目の最も悲惨な冬であった。四川省だけで七百万人が餓死し、祖母、叔母、叔父、母の最初の夫が次々と死んでいった飢えと死の嵐の中で、私は生を受けた――生き延びるために母が職場の青年と不倫をした挙句の子であった。母の子宮の中で経験した飢えの感覚は、十八年を経ても後遺症のように私を苦しめる。この見えない飢餓の感覚を癒すかのように、私は歴史教師との恋、いや肉体の接触と愛撫、性愛を求めようとする。

イギリス在住、女性作家、自伝、家族史といった言葉を並べると、ユン・チアン『ワイルド・スワン』（講談社、一九九八年）を思い出す人も多いであろう。しかし、虹影の自伝はあくまでも八〇年代初頭の中国に生きる少女の自分探しの物語であり、彼女が描いた極貧家族の苦難の歴史は、宿命のように少女の魂に深く刻まれたもので、成長にあたって永遠に背負わねばならず、断ち切ることのできない個人の負の遺産である。それ故に、本書の行間には高邁な政治批判や過大な修飾、ヒロイズムやセンチメンタルな抒情は一切なく、かわりに過去の現実を凝視する作家の冷徹な視線が光っている。例えば天秤棒担ぎの重労働で六人の子供を育て上げた母という、本来賞賛されるべき対象に向ける虹影の視線は冷たい。「いつも母は、タオルを絞りなおす前に、横になったままぐっすりと眠ってしまう。たいがいは右手をベッドの端からだらりと落とし、大きく足を開いたあられもない寝姿で、豚の鳴き声のような高鼾を部屋じゅうに響かせ、口元にはだらりと涎も垂れている。こんなときには、母の右手をベッドに戻し、顔を向こうむきにさせてしまう。母の寝顔は厭だった」（第一章）。この母

トップページにもどる

から生を受けた十八歳の少女の痛々しいまでの葛藤がよく伝わってくる。

また、歴史教師との恋も少女の人生における大きな出来事だった。文革中に紅衛兵の武装闘争に参加し、敵対セクトにいた弟を死なせた過去を持つ教師に、少女は恋心に似た感情を抱く。しかし文革後、武闘の責任を問われ、教師は現実の苦しみから逃れるため、少女と肉体関係をもった後、自殺する。彼女は妊娠と中絶という過酷な経験をさせられてしまう。二人の関係を「恋」と呼ぶべきかどうか、ためらいを感じずにはいられない。この関係に、胸を躍らせる期待や救いがなかったことは真実であろう。教師が少女に送った『人体解剖学』という本が象徴するように、二人が互いに求め合ったのは肉体による救済だったのかもしれない。この救済行為は結局、自殺と中絶という生命の消滅しかもたらさなかった。しかしそれ以外に、肉体的救済を超越した、上から与えられたような精神的救済があり得たのだろうか。虹影は二人の関係を次のように表現する。「わたしたちは二人とも、実はひどいエゴイストだった。心から愛し合ったことなど一度もなく、ちょうどわたしのいわゆる家族たちと同じように、自分のことしか頭になかったのだ」（第十七章）。エゴイスト――これこそ苦難な時代を生き延び、またその記憶を背負って生きねばならない人々の真実の姿かもしれない。歴史、時代といった抽象的な言葉で片付けるのではなく、生きるための罪、エゴ、醜さを直視することで、この作家は生を得ようとしているのである。

小説の随所にちりばめられた詳細な描写も見事である。例えば重慶という住み慣れた街。「蜘蛛の巣のかかった扉からは、一時代前の真っ赤なビロードの靴が現れ、黒い

フェルト帽を目深にかぶった男が通りの角にすっと消えていく。（中略）雨模様の暗い日には、汚水のあふれ出る坂道を通る人がみな、険しい顔つきをしたスパイに見えた。このあたりならどこでも、地面をわずかばかり掘り返せば不発弾や爆薬が出てきて、奇怪な暗号コードの書付けや、怪しげな出来事を綴った毛筆の証文なども発見されるはずだった」（第一章）。山と霧に覆われ、抗日戦争中は国民党政府が身を隠し、四九年に同地を放棄した際には大量の爆薬を地中に埋め、多くのスパイを潜伏させた街、そして中国建国後は共産党の粛清や紅衛兵の武装闘争が繰り広げられた街――虹影はその重層的な歴史背景を一つの具体的なイメージに結んでいる。このような繊細な感性をもつ一方、同時に彼女は目を覆いたくなるような悲惨な出来事を描ききるだけの筆力と精神力も具えている。小説の中に何度も登場する飢死や公開処刑の場面は言うまでもなく、公衆トイレで寄生虫を吐く女の子、長江に浮かぶ腐敗した男女の死体などといった衝撃的な描写も、決して物珍しさで読者に媚びるためのものではない。そこには、真実であるが故に忘れてしまいそうな、また忘れてしまいたい過去に立ち向かう作家の強靭な姿勢がある。評者も長江の畔で育ち、七、八〇年代を体験した一人である。記憶の彼方に忘却され、ときには美化されることさえありそうな過去は、虹影の生々しい文字の記録によって、恐怖とともに甦らされ、反芻させられるのである。

虹影の自伝は苦難史というよりも成長史であるが、同様に飢餓そのものよりも飢餓の意識を描いたものである。小説の中の少女は次のように自分に問いかける。「十八年も経っているのに、わたしの飢餓の後遺症はどうしてこんなにひどいのだろう。年上の人は生まれてから飢えに苦しみ、同い年の者はほとんどが胎内で飢えを経験している。みんなかろうじて生き延びてきたのだ。彼らはどうして、こういうことをすっかり忘れてしまえたのだろう」（第三章）。作家が苦痛に満ちた過去と文革後に生きる少女の飢餓の魂を執拗に描くのは、みんなが「忘れてしまった」からに他ならない。あるインタビューの中で虹影は次のように告白している。「本の中で描かれた“飢餓”は、私個人の生存飢餓、精神飢餓であり、性の飢餓でさえあるが、民族的な記憶の飢餓でもある。苦難の意識が飢餓に変わるのは、記憶の喪失に由来するからだ。一つの民族として、我々は記憶を失ってしまったと思う。このような意味で、『飢餓の娘』という本は、単に六〇年代生まれの人のために書いたものではない。実際、我々は七〇年代、八〇年代、更には九〇年代生まれの人々や次の世代、我々以後の世代にまで借りがあるのだ。この借りを返して、喪失を強いられた記憶を回復しなければならない」（「応該回復被迫失去的記憶――虹影専訪」、『K』二八七～二八八頁、花山文芸出版社、二〇〇二年）。文革終了からまもなく三十年にならんとし、中国は様々な変化と発展を遂げてきた。しかし依然として、多くの問題と矛盾を抱えているのが現実である。『飢餓の娘』の中国での出版にあたり、天安門事件に関する記述などの強制的削除という事実は、忘却の上での軽やかな「変身」が現在も尚、許されはしないことを訴えているのである。

本書を読み終えた後、なぜか八〇年代初頭の「今天派」詩人顧城の詩句が浮かんできた――「喪章をつけた帆船は、ゆっくり通り過ぎると、暗黄色の屍布を広げる」（「結束」）。この詩は、重慶で長江に流れ込む嘉陵江を「屍布」に喩えたことで、文革から解き放たれ始めた中国詩歌界の

トップページにもどる

大きな議論を呼んだ。母なる大河は、同時に死の陰影をも深く潜めていると感じ取った若き詩人の感性は、二十年余り後に、「今天派」と同世代の女性作家虹影の自伝小説によって、ようやく豊かに肉付けられたように思う。人を呑み込み、また包んでくれる長江に対して、虹影は深い理解と愛をも寄せている。「揚子江の流れが溺死した男たちや女たちの肉体を爛れるまで蝕むのは、彼らに対する抱擁、最後の愛撫、性の愛撫なのかもしれない」（第七章）と。

トップページにもどる